



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	はじめに
Author(s)	-
Citation	琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulletin(13): 3-18
Issue Date	2010-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41673
Rights	

はじめに

大学教育センターでは、2009年1月～2月にかけて、「琉球大学の教育改善のための学生調査」と銘打った調査を行い、全学部の学生2532名から回答を得た。これは来るべき法人評価や認証評価のためのエビデンスを収集することが主たる目的であった。

学生は大学の理念をどの程度理解しているか、教育目標で謳われている能力を学生はどの程度身につけているか、オフィスアワーをどの程度利用しているか、これらのことを大学評価では問われ、そのエビデンスの提出を求められている。こうしたエビデンスとしてもっとも相応しいものの一つは、質問紙調査によって得られたデータである。ここではこれに対応し、そのための基礎データを集積することを目的としている。

すでに2009年3月には集計を終え、4月には各学部に対して集計結果（全体集計＋学部別集計）とローデータをフィードバックしている。各学部ではこのデータを生かしながら、各種の大学評価に対応していただきたい。

ここではさらに分析を進め、単純な集計だけではわからない部分についてもふれていく。この結果が各種の評価に役立てば幸いである。

1. 調査対象

調査対象としたのは全学部の学士課程の学生であり、回収数は2532名（男64.9%、女35.1%）であった。各学部の内訳は以下の通りである。

表1) 調査対象の内訳

学部	学年	学年							合計
		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	その他	
法学部	度数	0	0	7	190	0	0	0	197
	学部の%	.0%	.0%	3.6%	96.4%	.0%	.0%	.0%	100.0%
観光産業科学部	度数	0	0	0	18	0	0	0	18
	学部の%	.0%	.0%	.0%	100.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
教育学部	度数	112	117	88	92	0	0	0	409
	学部の%	27.4%	28.6%	21.5%	22.5%	.0%	.0%	.0%	100.0%
理学部	度数	94	124	89	75	0	0	0	382
	学部の%	24.6%	32.5%	23.3%	19.6%	.0%	.0%	.0%	100.0%
医学部	度数	43	45	103	58	71	28	0	348
	学部の%	12.4%	12.9%	29.6%	16.7%	20.4%	8.0%	.0%	100.0%
工学部	度数	215	234	206	219	0	0	0	874
	学部の%	24.6%	26.6%	23.6%	25.1%	.0%	.0%	.0%	100.0%
農学部	度数	88	79	58	51	0	0	1	277
	学部の%	31.8%	28.5%	20.9%	18.4%	.0%	.0%	.4%	100.0%
合計	度数	552	599	551	703	71	28	1	2505
	学部の%	22.0%	23.9%	22.0%	28.1%	2.8%	1.1%	.0%	100.0%

学部の事情によりばらつきのあるところもある。例えば、法文学部では、基本的に4年次のみを対象として調査を実施したため、サンプルのほとんどが4年次となっている。また観光産業科学部は立ち上がったばかりの学部であり、調査自体が難しくサンプルが少な

めとなっている。このような若干のばらつきはあるもののその他の学部はほぼ均質に各学年から回答を得ている。

2. 大学の理念

大学評価において、大学の理念が学生にどの程度周知されているかは重要な評価項目である。ここでは、本学の掲げている基本理念、大学像、人材像、学生自身による人材像の自己評価という観点から分析を行いたい。

(1) 基本理念・大学像・人材像

琉球大学は基本理念として①自由平等、寛容平和、②真理の探究、③地域・国際社会への貢献、④平和・共生の追求という四つを掲げている。これらを在学生在がどの程度知っているかについて尋ねた。その結果をまとめたものが次の表である。

集計の結果が次の表である。「よく知っていた」と「ある程度知っていた」を合わせて「周知率」と考えると、「地域・国際社会への貢献」以外は低いと言わざるを得ない。「自由平等、寛容平和」「真理の探究」については2割にも満たない。

表2-1-1) 基本理念の周知度

		まったく 知らなかった	あまり 知らなかった	ある程度 知っていた	よく 知っていた	合計
1. 自由平等, 寛容平和	度数	1110	952	397	56	2532
	比率	44.1	37.9	15.8	2.2	100.0
2. 真理の探究	度数	1066	950	416	77	2532
	比率	42.5	37.9	16.6	3.1	100.0
3. 地域・国際社会への貢献	度数	834	735	732	209	2532
	比率	33.2	29.3	29.2	8.3	100.0
4. 平和・共生の追及	度数	973	906	515	114	2532
	比率	38.8	36.1	20.5	4.5	100.0

次に大学像についてである。集計結果が次の表である。

表2-1-2) 大学像の周知度

		まったく 知らなかった	あまり 知らなかった	ある程度 知っていた	よく 知っていた	合計
1. 熱帯・亜熱帯の地域特性に根ざした 世界水準の教育研究拠点大学	度数	691	777	823	223	2532
	比率	27.5	30.9	32.7	8.9	100.0
2. アジア・太平洋地域との交流を中心として 世界に開かれた国際性豊かな大学	度数	622	763	885	239	2532
	比率	24.8	30.4	35.3	9.5	100.0
3. 教育研究の成果を地域に還元しつつ、 社会の発展のために貢献し連携する大学	度数	800	1078	537	95	2532
	比率	31.9	42.9	21.4	3.8	100.0
4. 沖縄の歴史に学びつつ、平和・寛容の精神を 育み世界の平和と人類の福祉に貢献する大学	度数	652	850	825	184	2532
	比率	26.0	33.9	32.9	7.3	100.0
5. 人類の文化遺産を継承発展させ、 自然との調和・共生を目指す大学	度数	866	1081	477	89	2532
	比率	34.5	43.0	19.0	3.5	100.0

大学像「熱帯・亜熱帯の地域特性に根差した世界水準の教育研究拠点大学」「アジア・太平洋地域との交流を中心とし世界に開かれた国際性豊かな大学」「沖縄の歴史に学びつつ、平和・寛容の精神を育み世界の平和と人類の福祉に貢献する大学」については周知率が4割を超えており、ある程度の理解はなされていると言ってよいだろう。

ただし「教育研究の成果を地域に還元しつつ、社会の発展のために貢献し連携する大学」「人類の文化遺産を継承発展させ、自然との調和・共生を目指す大学」については3割を切っている。

次に人材像についてである。集計結果は次の表に示してある。

周知率はおおむね3割を超えているが、「意欲と自己実現力を有する人材」「豊かな教養と専門性を併せ持ち総合的な判断力を有する人材」については3割を切っている。

表2-1-3) 人材像の周知度

		まったく 知らなかった	あまり 知らなかった	ある程度 知っていた	よく 知っていた	合計
1. 地域及び広く社会に貢献する人材	度数	646	952	731	156	2532
	比率	26.0	38.3	29.4	6.3	100.0
2. 国際的に通用する外国語運用能力と国際 感覚を有し、国際社会で活躍する人材	度数	683	900	739	167	2532
	比率	27.5	36.2	29.5	6.7	100.0
3. 意欲と自己実現力を有する人材	度数	746	1064	575	95	2532
	比率	30.1	42.9	23.2	3.8	100.0
4. 豊かな教養と専門性を併せ持ち総合的な 判断力を有する人材	度数	734	1031	614	102	2532
	比率	29.6	41.6	24.7	4.1	100.0
5. 沖縄の歴史に学び、世界の平和及び 人類と自然の共生に貢献する人材	度数	668	910	747	154	2532
	比率	26.9	36.7	30.1	6.2	100.0

以上のように見てみると、基本理念・大学像・人材像の周知度については、おおむね低いと言えるだろう。

この問題を解決するために必要なのは、こうした理念を学生に意識される機会をより多く増やすことであろう。すでにHPにアップしたり、学生便覧に記載するなどの対策を行っているが、なかなか周知度を上げることには役立っていないようである。

今後は講義の初回に教員が、「この講義の目標は大学の理念のこの部分に該当します」といったアナウンスを行ったり、シラバスに該当する理念を記載したり、各学部学科でカリキュラムマップを作成し学生に配布するといった対応が必要になるだろう。大学教育センターではすでにそうした対応の準備を行っている。近い将来、周知率は上がってくるものと期待される。

なお、表中の合計の数値であるが、合計人数は欠損値を含めての人数(2532名)、比率(%)は欠損値を除いた場合の分布状況の合計(100%)を示している。したがって、人数の合計は常に2532名、比率の合計は常に100%となるが、左側の分布状況の数値とはずれることがあることを断っておきたい(以下同様)。

(2) 人材像の自己評価

次に先ほどふれた本学が掲げている人材像に、学生自身がどの程度近づいていると評価しているのかについて見てみたい。

表2-2) 人材像の自己評価

		まったく 近づいていない	あまり 近づいていない	ある程度 近づいている	充分 近づいている	合計
1. 地域及び広く社会に貢献する人材	人数	410	1216	784	75	2532
	比率	16.5	48.9	31.5	3.0	100.0
2. 国際的に通用する外国語運用能力と国際 感覚を有し、国際社会で活躍する人材	人数	905	1190	341	50	2532
	比率	36.4	47.9	13.7	2.0	100.0
3. 意欲と自己実現力を有する人材	人数	306	1028	987	159	2532
	比率	12.3	41.5	39.8	6.4	100.0
4. 豊かな教養と専門性を併せ持ち総合的な 判断力を有する人材	人数	372	1172	861	78	2532
	比率	15.0	47.2	34.7	3.1	100.0
5. 沖縄の歴史に学び、世界の平和及び 人類と自然の共生に貢献する人材	人数	544	1180	662	100	2532
	比率	21.9	47.5	26.6	4.0	100.0

表からわかるように、「意欲と自己実現力を有する人材」がもっとも高く、「近づいている」+「ある程度近づいている」を「達成率」と考えると、47.2%の学生が達成していることになる。次に「豊かな教養と専門性を併せ持ち総合的な判断力を有する人材」で37.8%、「地域及び広く社会に貢献する人材」で34.5%と、ある程度の割合を占めている。

一方、唯一3割を切って低いのが「国際的に通用する外国語運用能力と国際感覚を有し、国際社会で活躍する人材」15.7%である。外国語運用能力（特に英語）における達成状況が低いのは過去の調査などで以前から見られる傾向であり、理念と現実のギャップが一番大きい部分であろう。

本学ではこうした事態を解消するため、2009年度から新カリキュラムを実施している。統一試験の実施、専門英語の開設などを通して、4年一環での語学教育を充実を目指している。

3. 本学の基本的教育目標

次に、本学の基本的教育目標（共通教育の目標）について同様の分析を行いたい。
表からわかるように、本学では7つの基本的教育目標を掲げている。

表3-1) 基本的教育目標の周知度

		まったく 知らなかった	あまり 知らなかった	ある程度 知っていた	よく 知っていた	合計
1. 豊かな教養	人数	637	958	773	120	2532
	比率	25.6	38.5	31.1	4.8	100.0
2. 勤労性	人数	711	1111	566	97	2532
	比率	28.6	44.7	22.8	3.9	100.0
3. 創造性	人数	644	1056	677	108	2532
	比率	25.9	42.5	27.2	4.3	100.0
4. 専門的知識	人数	578	824	885	186	2532
	比率	23.4	33.3	35.8	7.5	100.0
5. 多様な文化の理解	人数	587	892	829	173	2532
	比率	23.7	36.0	33.4	7.0	100.0
6. 外国語(特に英語)による発表・討論能力	人数	662	988	682	152	2532
	比率	26.7	39.8	27.5	6.1	100.0
7. 情報技術活用能力	人数	704	1107	575	96	2532
	比率	28.4	44.6	23.2	3.9	100.0

さらにそうした掲げられた能力について、どの程度身につけているかを自己評価させたのが次の表である。

表3-2) 身につけた能力の自己評価

		まったく身 につけていない	あまり身 につけていない	ある程度身 につけている	よく身 につけている	合計
1. 豊かな教養	人数	250	1223	934	79	2532
	比率	10.1	49.2	37.6	3.2	100.0
2. 勤労性	人数	380	1087	873	143	2532
	比率	15.3	43.8	35.2	5.8	100.0
3. 創造性	人数	302	1218	838	118	2532
	比率	12.2	49.2	33.8	4.8	100.0
4. 専門的知識	人数	226	956	1144	153	2532
	比率	9.1	38.6	46.1	6.2	100.0
5. 多様な文化の理解	人数	386	1118	830	145	2532
	比率	15.6	45.1	33.5	5.8	100.0
6. 外国語(特に英語)による発表・討論能力	人数	837	1198	378	65	2532
	比率	33.8	48.3	15.3	2.6	100.0
7. 情報技術活用能力	人数	370	1096	873	146	2532
	比率	14.9	44.1	35.1	5.9	100.0

おおむね高くなっているが、やはりここでも「外国語(特に英語)による発表・討論能力」の項目が低めとなっている。

4. オフィスアワー

オフィスアワーを学生がどの程度利用しているかということも、大学評価の際、重要な項目となる。ここでは、学生のオフィスアワーの利用について数値を把握しておきたい。

表4-1) オフィスアワーの利用状況

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	よく利用する	41	1.6	1.6	1.6
	利用する	292	11.5	11.7	13.3
	あまり利用しない	874	34.5	34.9	48.2
	まったく利用しない	1297	51.2	51.8	100.0
	合計	2504	98.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	28	1.1		
合計		2532	100.0		

まとめたものが上の表である。分布状況を見てみると、「よく利用する」が41名で全体の1.6%、「利用する」が292名で11.7%、二つの合計は13.3%である。一方、「まったく利用しない」と回答した学生は全体の約半数いる(51.8%)。表の見方についてはこのように、度数(この場合人数)、有効パーセント、累積パーセントに注目していただきたい。

また次の表は、オフィスアワーの利用状況が学年によってどのように異なるのかを見たものである。

表4-2) 学年別に見たオフィスアワーの利用状況

		オフィスアワーをどの程度利用しますか				合計	
		よく利用する	利用する	あまり利用しない	まったく利用しない		
学年	1年次	度数	2	38	133	373	546
		学年の%	.4%	7.0%	24.4%	68.3%	100.0%
	2年次	度数	7	62	228	294	591
		学年の%	1.2%	10.5%	38.6%	49.7%	100.0%
	3年次	度数	9	66	211	258	544
		学年の%	1.7%	12.1%	38.8%	47.4%	100.0%
	4年次	度数	22	124	279	274	699
		学年の%	3.1%	17.7%	39.9%	39.2%	100.0%
	5年次	度数	0	1	8	62	71
		学年の%	.0%	1.4%	11.3%	87.3%	100.0%
	6年次	度数	1	0	0	27	28
		学年の%	3.6%	.0%	.0%	96.4%	100.0%
合計		度数	41	291	859	1288	2479
		学年の%	1.7%	11.7%	34.7%	52.0%	100.0%

この表からは、学年が上がるに従って利用状況が頻繁になっていることがわかる(1%水準で有意)。5、6年次は医学部のみなので、除外して考えると、「まったく利用しな

い」率が1年次で68.3%だったのに対し、4年次になると39.2%まで下がっている。このことから推察されるのは、特に専門教育におけるオフィスアワーの利用状況は比較的よいのではないかということである。

そのあたりを確認するため、利用経験のある学生に対して共通教育と専門教育のオフィスアワー利用頻度について尋ねた項目を分析してみた。それが次の表である。

表からわかるように、共通教育に関しては年平均約1回(0.96回)なのに対して、専門教育においては約5回(4.96回)と約5倍になっている。

表4-3) オフィスアワーの利用回数

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
オフィスアワーの年平均 利用回数<共通教育>	1216	0	50	.96	2.778
オフィスアワーの年平均 利用回数<専門教育>	1241	0	100	4.96	8.590
有効なケースの数(リストごと)	1189				

5. 教育の満足度

次に、本学の教育に対する学生の満足度について見てみたい。

ほとんどの項目で満足度（とても満足+ある程度満足）が6割を超えており、おおむね良好と言える。

表5-1) 教育の満足度

		まったく	あまり	ある程度	とても	合計
		満足していない	満足していない	満足している	満足している	
.共通教育全体	度数	161	719	1507	90	2532
	比率	6.5	29.0	60.8	3.6	100.0
.共通教育の人文系科目	度数	169	741	1410	136	2532
	比率	6.9	30.2	57.4	5.5	100.0
.共通教育の社会系科目	度数	210	767	1361	130	2532
	比率	8.5	31.1	55.1	5.3	100.0
.共通教育の自然系科目	度数	233	765	1296	156	2532
	比率	9.5	31.2	52.9	6.4	100.0
.共通教育の健康運動系科目	度数	115	479	1314	557	2532
	比率	4.7	19.4	53.3	22.6	100.0
.共通教育の総合科目	度数	147	709	1402	194	2532
	比率	6.0	28.9	57.2	7.9	100.0
.共通教育の琉大特色科目	度数	185	590	1329	340	2532
	比率	7.6	24.1	54.4	13.9	100.0
.共通教育の情報関係科目	度数	221	794	1290	144	2532
	比率	9.0	32.4	52.7	5.9	100.0
.共通教育の外国語科目	度数	237	675	1317	249	2532
	比率	9.6	27.2	53.1	10.0	100.0
.共通教育の先週科目及び転換科目(専門基礎)	度数	189	745	1335	165	2532
	比率	7.8	30.6	54.8	6.8	100.0
.共通教育の高年次総合科目	度数	224	913	1037	97	2532
	比率	9.9	40.2	45.7	4.3	100.0
.学部専門教育全体	度数	135	652	1383	238	2532
	比率	5.6	27.1	57.4	9.9	100.0

6. 情報科学演習

現在、本学では「情報科学演習」が必修となっており、全員が履修している。また①「情報倫理」（ネチケット、著作権など）、②「情報発信」、③「情報処理」について授業内容として取り扱うよう定められている。そして中期計画において、それらがきちんと実行されるよう記述がある。

そこで、学生に尋ねることによって、情報科学演習の実施状況について把握することにした。具体的には、以上の三つが各クラスできちんと実施されているか、また学習したうえで学生の理解度はどうかについて尋ねてみた。

表6-1) 情報科学演習の実施状況

		まったく 当てはまらない	あまり 当てはまらない	ある程度 当てはまる	とても 当てはまる	合計
1. 情報倫理の内容について扱っていた	度数	333	791	948	263	2532
	比率	14.3	33.9	40.6	11.3	100.0
2. 情報発信の内容について扱っていた	度数	273	715	1101	244	2532
	比率	11.7	30.6	47.2	10.5	100.0
3. 情報処理の内容について扱っていた	度数	203	516	1256	360	2532
	比率	8.7	22.1	53.8	15.4	100.0
4. 情報倫理の内容について理解できた	度数	311	775	1007	235	2532
	比率	13.4	33.3	43.3	10.1	100.0
5. 情報発信の内容について理解できた	度数	262	774	1082	212	2532
	比率	11.2	33.2	46.4	9.1	100.0
6. 情報処理の内容について理解できた	度数	229	664	1202	239	2532
	比率	9.8	28.4	51.5	10.2	100.0

まず、内容として上記三つが扱われていたかどうかについては、情報倫理14.3%、情報発信11.7%、情報処理8.7と、それぞれ約1割の学生が「まったく当てはまらない」と回答しており、学生の記憶に間違いがないとすると、約1割のクラスで上記内容が扱われていないということになる。

しかし、情報科学演習を担当する教員間では、すでにこれらの内容を盛り込むことが合意されており、推測ではあるが、扱っていないと言うよりは、ふれる時間が少ない等、質や量に依然として問題があるととらえるべきであると思われる。したがって、そのあたりの教員間の周知が進んでいけば、徐々に解消される問題である。

試みとして、これらの項目について学年間で違いがあるかについて分析してみた。

表 6-2) 情報倫理についての学年間比較

			情報倫理の内容について扱っていた				合計
			まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	ある程度当てはまる	とても当てはまる	
学年	1年次	度数	56	145	199	79	479
		学年の%	11.7%	30.3%	41.5%	16.5%	100.0%
	2年次	度数	68	180	229	76	553
		学年の%	12.3%	32.5%	41.4%	13.7%	100.0%
	3年次	度数	59	182	224	61	526
		学年の%	11.2%	34.6%	42.6%	11.6%	100.0%
	4年次	度数	130	241	249	38	658
		学年の%	19.8%	36.6%	37.8%	5.8%	100.0%
	5年次	度数	11	28	23	4	66
		学年の%	16.7%	42.4%	34.8%	6.1%	100.0%
	6年次	度数	5	8	11	3	27
		学年の%	18.5%	29.6%	40.7%	11.1%	100.0%
合計		度数	329	784	935	261	2309
		学年の%	14.2%	34.0%	40.5%	11.3%	100.0%

学年が低くなるにしたがって当てはまる率が高くなっている（5、6年次は医学部で人数も少ないので省いて考えた）。つまり、教員間で情報倫理について取り扱うという合意がなされ、それが徐々に浸透している過程であると考えられる。

この傾向は情報発信や情報処理についても同様である（どちらも1%水準で有意）。

表 6-3) 情報発信についての学年間比較

			情報発信の内容について扱っていた				合計
			まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	ある程度当てはまる	とても当てはまる	
学年	1年次	度数	48	126	233	73	480
		学年の%	10.0%	26.3%	48.5%	15.2%	100.0%
	2年次	度数	61	168	255	68	552
		学年の%	11.1%	30.4%	46.2%	12.3%	100.0%
	3年次	度数	50	166	262	47	525
		学年の%	9.5%	31.6%	49.9%	9.0%	100.0%
	4年次	度数	95	218	296	49	658
		学年の%	14.4%	33.1%	45.0%	7.4%	100.0%
	5年次	度数	10	25	27	3	65
		学年の%	15.4%	38.5%	41.5%	4.6%	100.0%
	6年次	度数	6	7	12	2	27
		学年の%	22.2%	25.9%	44.4%	7.4%	100.0%
合計		度数	270	710	1085	242	2307
		学年の%	11.7%	30.8%	47.0%	10.5%	100.0%

表6-4) 情報処理についての学年間比較

	情報処理の内容について扱っていた				合計	
	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	ある程度当てはまる	とても当てはまる		
学年 1年次	度数	41	104	237	98	480
	学年の%	8.5%	21.7%	49.4%	20.4%	100.0%
2年次	度数	41	123	287	102	553
	学年の%	7.4%	22.2%	51.9%	18.4%	100.0%
3年次	度数	42	112	302	70	526
	学年の%	8.0%	21.3%	57.4%	13.3%	100.0%
4年次	度数	65	148	364	80	657
	学年の%	9.9%	22.5%	55.4%	12.2%	100.0%
5年次	度数	7	22	34	3	66
	学年の%	10.6%	33.3%	51.5%	4.5%	100.0%
6年次	度数	4	5	16	2	27
	学年の%	14.8%	18.5%	59.3%	7.4%	100.0%
合計	度数	200	514	1240	355	2309
	学年の%	8.7%	22.3%	53.7%	15.4%	100.0%

やはり、現在進行中の取組であり、今後徐々に解消していくと考えて差し支えないようである。

なお、三つの内容の理解については、情報処理61.7% (51.5+10.2) など、おおむね良好であった (表6-1)。

7. 高年次総合科目

(1) 高年次総合科目に対する要望

本学には総合科目の中に「高年次総合科目」という科目を設けており、3年次以上の学生であっても共通教育の科目を積極的に履修できるカリキュラムとなっている。ちなみに20年度は、「倫理総合討論」「現代アメリカ論」が開講されている。そして中期計画では高年次総合科目の充実が謳われており、21年度からの新設科目も二つある。

ここでは、今後の充実のため、学生からのニーズを把握したい。

表7) 高年次総合科目

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	もっと開講科目数を増やしてほしい	600	23.7	26.5	26.5
	もっとクラス数を増やしてほしい	160	6.3	7.1	33.6
	2年次以下の学生にも履修できるようにしてほしい	432	17.1	19.1	52.7
	あまり必要ない	278	11.0	12.3	65.0
	このままでよい	791	31.2	35.0	100.0
	合計	2261	89.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	271	10.7		
合計		2532	100.0		

表の有効パーセントからわかるように、「このままでよい」という学生が35.0%ともっとも多いものの、「もっと開講科目数を増やしてほしい」という回答も26.5%あった。やはり課題は豊富なバリエーションの科目を提供することであろう。

(2) 自由記述から

また、高年次総合科目については自由記述形式で要望を尋ねている。いくつかの意見を掲載しておきたい。

まず目立ったのは、そもそも高年次総合科目の存在自体を知らないという学生が多かったということである。

- ・「高年次総合科目の存在を知らなかった。もっと周知されるよう努力してほしい。」(法文学部4年次)
- ・「高年次総合科目がある事を今知った」(教育学部4年次)
- ・「そもそも「高年次総合科目」というものを知らなかったので、もっとアピールして欲しい」(理学部4年次)
- ・「というか知りませんでした。初耳です!!」(工学部4年次)
- ・「このことについて、あまり知らなかったので、授業登録の時などにもっとわかりやすく記載してほしい。」(工学部4年次)
- ・「なぜわざわざ高年次しか受講できないのか今はじめて分かりました。」(医学部3年次)

確かに指摘のように、時間割配当表やシラバス上でも高年次総合科目という識別はしにくく、周知がなされていないように思われる。大学教育センターとしてさらなる周知の努力を行いたい。ただ、こうした質問紙調査を実施すること自体、趣旨説明をしているので学生へのアピールの機会とった。その点については有意義であったと考えられる。

次に多かったのは、先ほどと同様、科目の充実に関する意見である。いくつか紹介しておきたい。

- ・「高年次の必修科目と同じ日時だったり、必修科目に支障をきたすようであれば取る気がしません。実際、後期で一つあきらめたものがありました。科目数や、あらゆる曜日、時限があれば助かります。」（農学部3年次）
- ・「最近、モラルの低下が目立っていると思うので、科目数を増やし、積極的に授講させるべき。」（工学部4年次）
- ・「就職関連の講義を増やしてほしい」（工学部4年次）

しかし中には、非常に前向きで建設的な意見も多く見られた。いくつか紹介しておきたい。

- ・「3年次以上でも、やる気があれば科目をとれることは魅力的です。」（教育学部2年次）
- ・「とても素敵な制度だと思うのでぜひぜひもっと充実していくとうれしいです！」（教育学部3年次）
- ・「非常に有用」（医学部5年次）
- ・「更に教養を深めたいので、色々な分野での、著名人に講義をしてほしい。」（工学部3年次）
- ・「最後の学生生活を有意義にすごす為、社会に結びつきのある授業を開講してほしい。」（農学部4年次）
- ・「非常にLevelの高いものにし、差別化を図るのは、良い事だと思います。」（工学部4年次）
- ・「第2外国語は1年のときに学んでいらい4年生になるまで授業を受けてないので、高年次総合で、第2外国語の講座をもっとつくって欲しい」（工学部4年次）

こうしたさまざまな意見も勘案しながら高年次総合科目のますますの充実をはかりたい。

8. 入学形態別分析

次に入学形態別による分析を試みたい。例えば、推薦入試で入学した学生は入学時の成績は一般入試で入学した学生に比べ低い、入学後の成績は良いという見方がある。また、後期入試で入学した学生は、入学時の成績は良いものの、入学後の成績はあまり良くないということもよく言われる。ここでは分析によりこうしたことを確かめたい。

まず、入学時の成績（自己評価）を5段階に分け、それを入学形態別に分けたものが次の表である。AO、3年次編入、21GPは人数が少ないため、その部分では信頼性のある分析はできないが、21GPの学生の成績がもっとも高く（上の方44.4%）、次に後期入試（21.6%）、前期入試（14.1%）の順で成績がよい（1%水準で有意）。

表8-1) 入学時の成績の入試形態別比較

			入学時の成績					合計
			上の方	中の上	中程度	中の下	下の方	
入学形態	前期入試	度数	242	315	613	242	309	1721
		入学形態の%	14.1%	18.3%	35.6%	14.1%	18.0%	100.0%
	後期入試	度数	90	87	111	58	71	417
		入学形態の%	21.6%	20.9%	26.6%	13.9%	17.0%	100.0%
	推薦入試	度数	24	35	72	45	106	282
		入学形態の%	8.5%	12.4%	25.5%	16.0%	37.6%	100.0%
	AO入試	度数	0	0	2	0	3	5
		入学形態の%	.0%	.0%	40.0%	.0%	60.0%	100.0%
	3年次編入	度数	2	4	14	5	8	33
		入学形態の%	6.1%	12.1%	42.4%	15.2%	24.2%	100.0%
	21世紀GP	度数	4	3	1	1	0	9
		入学形態の%	44.4%	33.3%	11.1%	11.1%	.0%	100.0%
	その他	度数	1	4	6	2	12	25
		入学形態の%	4.0%	16.0%	24.0%	8.0%	48.0%	100.0%
合計		度数	363	448	819	353	509	2492
		入学形態の%	14.6%	18.0%	32.9%	14.2%	20.4%	100.0%

これは予想通りの結果であり、一般的に言われていることと一致している。

次に、大学入学後の成績（現在の成績）について見てみよう。現在の成績（自己評価）については少し様相が変わっている。

まずもっとも成績が良いのは21GPの学生であることに変わりないが、推薦入試の学生の成績が一般入学の学生を抜いて伸びてきていると言える。14.8%と入学時の8.6%から伸びて2番目の成績となっている。

このことから、推薦入試で入学した学生は、入学時の成績は低いものの、入学後は学習意欲の高さなどから挽回していると言える。逆に、後期入試で入学した学生は、入学後、やや成績が下降する傾向がある（1%水準で有意）。

表 8 - 2) 現在の成績の入学形態別比較

			現在の成績					合計
			上の方	中の上	中程度	中の下	下の方	
入学 形態	前期入試	度数	132	283	641	347	316	1719
		入学形態の%	7.7%	16.5%	37.3%	20.2%	18.4%	100.0%
	後期入試	度数	42	71	142	86	77	418
		入学形態の%	10.0%	17.0%	34.0%	20.6%	18.4%	100.0%
	推薦入試	度数	42	59	91	42	50	284
		入学形態の%	14.8%	20.8%	32.0%	14.8%	17.6%	100.0%
	AO入試	度数	0	0	2	0	3	5
		入学形態の%	.0%	.0%	40.0%	.0%	60.0%	100.0%
	3年次編入	度数	3	9	13	9	4	38
		入学形態の%	7.9%	23.7%	34.2%	23.7%	10.5%	100.0%
	21世紀GP	度数	3	5	1	0	0	9
		入学形態の%	33.3%	55.6%	11.1%	.0%	.0%	100.0%
	その他	度数	4	5	10	3	7	29
		入学形態の%	13.8%	17.2%	34.5%	10.3%	24.1%	100.0%
	合計	度数	226	432	900	487	457	2502
		入学形態の%	9.0%	17.3%	36.0%	19.5%	18.3%	100.0%

おわりに

以上のような結果は、今後の大学評価の重要なエビデンスとなりうる。データは各学部
にフィードバックされているので、今後各学部でさらに詳細な分析が進むことが期待され
る。各種の大学評価に本調査結果が活用されれば幸いである。